博士（文学）　戸　田　　瞳

学位論文題名

『うつほ物語』の「家」－主導権の逆転と変質－

学位論文内容の要旨

本論文の内容は以下のとおりである。

序章

『うつほ物語』の研究は長らく、成立年代や作者の特定を図ることや、本文を確立させることに重きが置かれてきた。このうち特に本文については、不明瞭な箇所や矛盾箇所が依然として数多く存在しており、この点は新資料が発見されない限りは如何とも処理し難い。結果として一九七〇年代以降は、現在我々が目にすることのできる本文を尊重した作品論が盛んに行われるようになった。その中で生まれたのが、いわゆる王権論や祝祭論、描写論、人物論、音楽論、宗教論、絵解論などである。本論文では、これらのうち特に描写論と人物論を土台とし、この物語における、音楽や政治を軸とした「家」の様相を探っていく。

第一章

いわゆる若菜の女楽の描写に顕著なように、『源氏物語』では、演奏者の人物造型と音の特徴との如実な連動が認められ、それはひいては作品全体の解釈へと繋げられてきた。だが本章では、『源氏物語』に先んじて成立した『うつほ物語』においても、既に人物造型と音楽との関連性を見出せることを確認した。特に俊蔭一族に関して言えば、琴の音が一族の在り方と関わってくるのが男性、人となりがより直接的に琴の音と連動するのが女性と捉えることができよう。また、俊蔭一族以外の人物についても、人物造型の一部には音楽との関わり方が組み込まれている。音楽と人物造型の関わりという、登場人物の描き方の新たな方法を切り拓いたのは、『うつほ物語』であったと言える。

第二章

源正頼という人物は、典型的な摂関政治の担い手と捉えられがちである。だがその実、正頼が行ったのは、あて宮求婚譚を展開して世間の注目を集めたこと、そして、仲忠という優れた人物を見出し、彼との繋がりを強めたというところまでであり、入内自体の主導権は大宮ら皇族周辺の人物の手にあったと言える。ただ、入内後のあて宮は、その立場を利用して宮中を動かすようになる。ここに、皇室に動かされる立場から皇室を動かす立場へという、主導権の逆転がある。だがその一方で正頼は、実質的な権力を失いつつある。それは、正頼の存在意義があて宮求婚譚にこそあったということに起因していると考えられ、その役割を終えた正頼は、もはや権力から突き放された描き方をされるしかない。

第三章

中国には古来、「君子左琴」または「右書左琴」の思想が根付いている。この思想については既に、「時をえた為政者」の琴と「時をえず隠居の君子」の琴という二面性が指摘されており、後者は俊蔭に代表されるものと言って良い。一方、前者を体現する者はおらず、『うつほ物語』において琴と政治が同時に成り立たないことを指摘したのが本章である。この作品における「時をえた為政者」の琴は、君子本人によって体現されるのではなく、周囲の人間によって

奏でられた琴を君子が価値付け、演出するという形へとずらされている。また、『うつほ物語』における「君子」は表立って対立せず、立坊争いの場でも、仲忠は表立って異母妹梨壺に加勢することをしない。だが、その現象はすなわち仲忠の政治性を否定するものではなく、彼はこのとき既に、立坊した次期春宮のもとに娘いぬ宮を入内させることを見据えていたと考えられる。仲忠は源氏との関係を友好な状態に保ったまま、しかし仲頼の子どもたちなどを巻き込む形で、次代への足掛かりを築いていくのである。

第四章

あて宮の入内に伴い、仲忠のもとには朱雀帝の女一の宮が降嫁したが、あて宮との結婚を望んでいた彼にとって、これは不本意な結婚であった。皇女の降嫁をこのように受け止めていた仲忠、そして彼の属する琴の一族は、皇室とどのような関係を築いていくのか。これまでこの問題は、琴の家と朝廷を対立するものと解釈するか、または対照的に、俊蔭一族にとって帝は不可欠な存在であると解釈するかという、両極端な捉えられ方をしてきたように思うが、本論文ではこれを、反発するか否かのいずれか一方に集約できる問題ではないと考える。俊蔭一族は、ときに皇室の力を利用し、秘琴を価値付けさせ、また官位も得るが、その一方では皇女の琴を批判し、皇室を琴から遠ざける。そして、弾琴を強要されようとも、一族の信念に適わない限りはその命令にも屈しない。皇室側がその事実に気付くことはなくとも、主導権は常に俊蔭一族に握られていると言える。

第五章

仲忠の父兼雅には、宰相の上と呼ばれる妻妾と、彼女との間に生まれた息子小君がいた。従来、宰相の上親子に関する考察は、「俊蔭の娘と宰相の上」「仲忠と小君」という「横の繋がり」にのみ目を向けて行われてきたが、本論文では特に「縦の繋がり」、つまり血縁関係に注目した。彼らには、俊蔭一族と同様に血縁による音楽の相伝が認められる他、血縁者間における人物描写の相似が見える。ただ、宰相の上親子は俊蔭一族の「対」のように描かれながらも、それに匹敵する在り方を貫くことはできない。小君が仲忠の子として機能していく構図は、小君が琵琶もろとも俊蔭一族に取り込まれるという形である。琵琶の親子たる宰相の上親子は、「縦の繋がり」と「横の繋がり」、そして音楽、詩、漢籍という幾重にも重なった要素により、琴の一族たる俊蔭一族の繁栄を支え、それを一層強固なものにしていく。

第六章

涼の存在意義は常に、他者を相対化するという点にあった。吹上の源氏として豪奢な生活を送る涼は、琴の名手として君臨してきた仲忠の立場を危うくすることで、彼をあて宮求婚譚の敗者の位置へと引き下げ、さらには、擬似宮中とも言うべき空間を演出してきた正頼の存在をも相対化した。もっとも、都から離れた吹上にいたからこそ保持されてきた涼のアイデンティティは、上京と同時に失われているのであるが、その中で、涼を意識する正頼像が依然として変わっていないことは注目に値する。それは、仲忠という次代を担う人物の絶対性を保証するという、次なる課題が涼に課せられたことに起因していると思われる。吹上時代には、春宮入内というあて宮求婚譚の結末を引き出す役割、そして上京後の戯画化を経て、第一子誕生後には仲忠を絶対化する役割。涼の変質に次ぐ変質は、前半は正頼、後半は仲忠を中心に展開されていると言える。

終章

『うつほ物語』の「家」について扱った論文の中には、「藤氏排斥」なる偏向を読み取ったものもあるが、本論文における考察を総合して見るに、事態は「藤氏排斥」どころか「源氏排

斥」または「藤氏躍進」に向けて舵を切っている。摂関の権力を描かれない源氏および正頼像は、帝をはじめとした人々の信頼を集め、確固たる立場を得ていく仲忠の姿とは対照的であり、源氏を取り巻く状況が真に好転しているとは言い難いのである。また、『うつほ物語』は一つの論理のもとに成り立っているわけではなく、「家」「人」同士の関係も、立場の逆転や変質で構成されている。その中でも、正頼を中心とした源氏の世の中から仲忠率いる藤氏の世の中への移行は、物語上の最も大きな逆転現象であると言える。この構図は後に、『源氏物語』第三部宇治十帖において、源氏の物語から藤氏の物語へという形で再現されているように思うが、この点の追究は今後の研究課題としたい。

学位論文審査の要旨

主　査　　教　授　　後　藤　康　文
副　査　　准教授　　長谷川　千　尋
副　査　　准教授　　小　倉　真紀子

学位論文題名

『うつほ物語』の「家」－主導権の逆転と変質－

審査の方法および経過

第１回審査委員会（平成２４年１２月１４日）　日程調整および査読の開始。
第２回審査委員会（平成２５年１月１０日）　論文内容の検討と質問事項等の整理。
第３回審査委員会（平成２５年１月１１日）　口述試験の実施および試験内容の検討。
第４回審査委員会（平成２５年１月１１日）　学位授与の可否判定および意見交換。
第５回審査委員会（平成２５年１月１８日）　主査による審査報告書案の作成と検討。
第６回審査委員会（平成２５年１月２５日）　審査報告書の確定。

審査の概要

１）本論文の観点と方法

『源氏物語』前夜に完成をみたわが国初の本格的長編『うつほ物語』は、複雑な成立過程や現存本文の抱える損傷の多さなどが原因して、研究対象とするにはかなりの覚悟と秀でた能力が要求される厄介な作品といえるが、本論文は、そうした「難敵」に敢然と対峙して眼前の沃野を切り拓こうとする意欲作である。

その方法は、まずもって本文の精密な読解に努め立論に必要な箇所を洗い出したのちに、それらを論理的に総合して独自の仮説を導き論証を図るというきわめてオーソドックスなものであり、その観点は、はじめにこの物語を濫觴とする人物描写と音楽描写の連動のあり方に着目して清原俊蔭一族を中心とした登場人物の造型を押さえたうえで、俊蔭一族や源正頼家・皇室といった「家」同士がそれぞれ音楽や政治を軸にいかなる関係を築いているのか、さらには、藤原仲忠を取り巻く人物、特に宰相の上（藤原兼雅の妾妻のひとり）親子や源涼（仲忠の好敵手）が作中でどのように機能しているのかを探究するところにある。

２）当該研究領域における本論文の成果

本論文の主部を構成する全六章のうち、源正頼像を克明に追尋しその役割を明らかにした第二章は査読付き全国誌に、音楽描写と人物造型との有機的連関を余すところなく論じた第一章、俊蔭一族と皇室との力関係を解明した第四章、宰相の上親子が楼上・上巻において突如クローズ・アップされる意味を鮮やかに読み解いた第五章は、いずれも査読付き学会誌または論集に発表済みの学術論文を基にしており、本申請者は、斯界においてすでに高い声価を得ているといえる。のみならず、新たに書き下ろされ

た二つの章、すなわち、『うつほ物語』においては琴と政治が共栄できないことを説いた第三章、常に他者を相対化し続ける源涼の機能を指摘した第六章ともに新見に富んでおり、これらをトータルした本論文は、十分な統一性を有する優れた『うつほ物語』論としてきわめて高い次元に到達していると判断される。

もっとも、論述がともすると図式的になりがちで説明不足な箇所が散見される点、申請者の呈示した同じ材料から別の読み方ができる部分もある点、平安朝当時の「家」の概念を再確認する必要があるのではないかという点等、不満の残る面も確かにある。しかしながら、そうした問題点を差し引いてもなお本論文の価値はさして揺らぐものではなく、これらはむしろ、本申請者が今後さらに研究を積み重ね本論文を核とした著書を上梓するまでの、良い意味での課題となろう。

3）学位授与に関する委員会の所見

以上のような審査結果により、本審査委員会では、全員一致して本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると認定した。